

奉仕の人 真の戦力

まちづくりの

真の戦力

義農作兵衛に学べ

やがて地域は動き出す――

「身を犠牲にして幾百人の命を救うことができたなら
私の本望である」

多くの人々の命と村の農業を大飢饉ききんから守るため、
自分の命と引き替えに麦種を残した義農作兵衛。

松前町には、今なお、

奉仕の心「義農精神」が息づいています。

人は誰かを支えたり、

誰かに支えられたりしながら生きています。

地域社会は共生によって成り立っています。

「命をかけて」とまではいかななくても

「心を込めて」奉仕することはできます。

ずっとこの町で生きていくために、

もっと寄り添って生きていくために、

今、「義農精神」を考えます。

「穀物の種は命より大切」 義農作兵衛を振り返る

「第6回全国むら芝居サミットinまさき」は10月23日、松前総合文化センターで開かれた。サミットで大勢の人の心を揺さぶったのが義農作兵衛の半生を描いた舞台だった。

Story of Gino Sakube

「当日の朝、スタッフミーティングを終えて、受付場所に駆けつけると、開場を待ちわびる長蛇の列。驚きました」

サミット終了後も興奮冷めやらぬ徳田唯純実行委員会会長。700席の会場は超満員。立ち見が出るにぎわいでした。

今回、地元松前町からは「徳丸一座」「ひよこたん一座」（中川原）の2団体が出演。全国から出演した4団体と共に個性あふれる村芝居を披露しました。

「ガンバレ にっぽん酒」という演目でオープニングを飾ったひよこたん一座は、ユニークな舞台で会場を沸かせました。トリを飾った徳丸一座の舞台は「あっぱれ作兵衛 義農伝」。作品は、郷土の偉人義農作兵衛の半生を描いた愛と感動の物語。村人を救った作兵衛の偉業を全国に発信しました。原作・

脚本は演出家の大澤絃一さん。昨年、坊ちゃん劇場の完熟一座が演じた台本を書き直したものです。音響、照明、大道具などの裏方は、徳丸一座をはじめとする住民スタッフが担当しました。

出演者17人は、50分の舞台を創るために約半年間練習を重ねてきました。役になりきった迫真の演技に、客席では心を揺さぶられ、涙を流す人の姿も。どんなことが降りても鳴り止まない拍手が、舞台の成功を物語っていました。

300年の時を越え、作兵衛の精神を再現した舞台が現代に生きる私たちに語りかけたもの。それは、「奉仕の心が人を、地域を救う」というまちづくりの原点だったのかもしれない。



全国むら芝居サミットinまさき
実行委員会会長
徳丸一座団員
徳田唯純さん

徳丸一座の約半年間の芝居稽古、サミット当日の徳丸の住民をはじめとした大勢のボランティア。みんなの努力に胸がいっぱいです。何よりうれしいのは徳丸が結束できたこと。徳丸の財産です。



1_貞享5(1688)年、筒井村の貧しい農家に生まれた作兵衛は、おとなしくて何事にも真面目な性格で、6、7歳の頃から田に出て父の手助けをした。物語は作兵衛とおたまの結婚式から始まる。作兵衛26歳、おたま22歳の時のこと。作兵衛の母おつるは、1年前の七夕に病死した。



2,3_やがて作兵衛とおたまの間に作市が生まれた。作兵衛の父作平は、じいちゃんになれたことを心から喜んだ。七夕の空を見上げ、作兵衛は作平に「わしはなんとしても自分持ちの田畑を耕してみたい」と夢を語った。

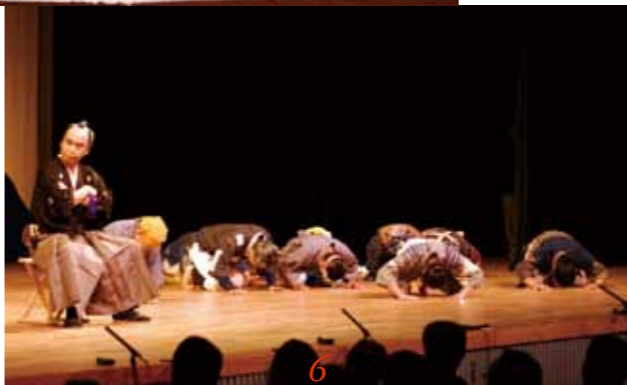


4,5_少しでもお金がたまるように、作兵衛はわらじを編んだ。おたまは仕立て物を縫い上げた。そして荒地を買い、開墾した。その地で麦の実が穂をつけるようになった頃、作兵衛はその続きにある八畝の荒地も買いたと思った。

6_荒地を立派な田畑にすれば、自分のものになると同時に筒井村のものになると思ったのだ。組頭は作兵衛の思いを庄屋に、庄屋は役人に伝えた。役人は作兵衛に「あの田畑はそなたのもち高には入れられん」と伝えた。下田しか持たぬ身の作兵衛では年貢を納めきれない、無理はしてはいけないという考えからだった。



作兵衛は「下田じゃいうて捨て置きますれば、石高を減らすことになってしまいます。下田でも手を入れて上田にするんが百姓の勤め。わしの力で上田にして年貢も納めてみせませう」と申し入れた。いとこの三郎右衛門をはじめ、組頭や村人も土下座して願った。こうして八畝の田地は作兵衛の持ち高となった。



7_おたまはかわいい女の子・おかめを産んだ。数年後、70歳になった作平は寝込み、16歳のおかめが看病した。19歳の作市は、父に習い、わらじを編んだ。おたまは40歳で亡くなった。

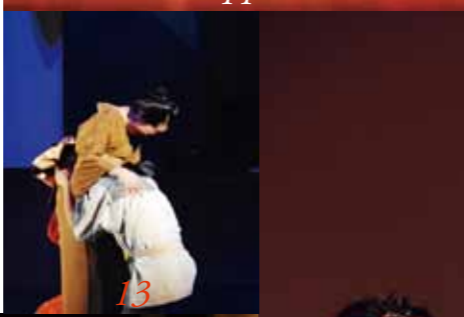
8_「作ちゃん、大変じゃ」。3月から降り始めた長雨で川が増水、田のせきが切れそうになった。作市と作兵衛は慌てて田へ。

9_やっと雨が上がって晴れ間が見えた。ここぞとばかりに、みんなで力を合わせて田植えをした。

10_喜びもつかの間、突然の雷鳴と稲光。そして、猛烈な雨と風。「いかん、土手がきれた」。悲痛な叫びが広がる。役人、庄屋と組頭が筒井村の飢餓のありさまを巡察した。村は水浸し、麦は腐り、稲は育たなかった。さらに稲にウンカという虫が発生。食べ物なくなった農民は一人、二人と死んでいった。



11_6月に作平を、8月に作市を失った作兵衛は、とうとう畑で倒れた。村人たちは作兵衛を家に連れて帰った。三郎右衛門、組頭、庄屋、おかめ、村人みんなが作兵衛を囲んだ。



12_作兵衛は一俵の俵を見せて言った。「この俵に麦を一斗ほど残しとる。麦種にしよ思ての」。村人は驚き、おかめと二人、これを食べて生き延びよう言った。しかし、作兵衛は「食べてもたら来年からどうして生きていくんじゃ。この麦種をおまえに預けるけん。きっと麦が実るように立派にしてくれ」と言い残し、息を引き取った。

13_幻想の世界。「母ちゃん」。作兵衛はおつるに駆け寄って泣いた。おかめも作平も作市も、みんなで麦種をまいた。



14_命の花、愛の花を咲かせよう歌った。「農は国の基、種は農の本よ。だからわしら百姓は、その種を大事に育てて、命の花が立派に咲くようにせんといかん」と。



「義農精神」が息づく町 ここにも、あそこにも作兵衛

わが身を犠牲にして麦種を守った作兵衛。人々から義農として追慕され、その功績は今なお語り継がれている。「義農精神」が伝説となったその理由とは？

作兵衛が亡くなった翌年、麦種は村人によって大切にまかれました。作兵衛の壮絶な最期は、筒井村庄屋から藩庁へ上申されました。藩庁は享保17(1732)年、いとこの三郎右衛門に「作職一切預かり」「作兵衛の襲名」と「追善執行」を命じ、米5俵を贈り、墓碑の建設を命じました。松山藩は年貢を免除、村人は飢饉の苦しみから脱することができました。

伊予郡教育倶楽部は、義農作兵衛・鍵谷カナの功徳表彰会を開くことを決議しました。両氏を題材にした詩歌・俳句などを募集しました。全国から作品が寄せられました。「宮をたてて稲の神とぞあがめける―正岡子規」「義農名は作兵衛と申し国の秋―高浜虚子」など著名な俳人からも寄せられました。

明治29(1896)年、下浮穴(1776)年、伊予松山藩主・松平定静は、彼の功績を後世に伝えるため頌徳碑を建立しました。その後も作兵衛の尊い自己犠牲の精神は多くの人々に語り継がれ、明治14(1881)年には筒井と近隣村の有志が作兵衛をしのび神社「義農神社」建立を申請し、許可されました。

明治45(1912)年には前内務大臣平田東助が義農の墓を参拝。これを機に、頌徳碑建立と義農精神発揚のため「義農会」が発足しました。大正2(1913)年9月23日には盛大な祭典が行われ、松前小学校の児童と職員が神社と墓に義農精神を銘記しました。このような義農祭行事は後々まで続き、大正13(1924)年には伊予実業学校生(現伊予農業高等学校)が、昭和になると松

山農業生(現愛大附属農業高等学校)が加わりました。相撲大会も年を重ねるごとに参加地域を広げていきました。平田東助の来訪は義農精神高揚に大きな影響を与えました。義農作兵衛の義気を全国に広め、義農精神の体得に努めようとする気風を起したのです。

昭和3(1928)年、郡役所廃止に伴い、義農会長は松前町長に移されました。同年4月23日には県知事、郡内町村長ほか大勢の町内有志が参列して、「近來まれなる祭典」を行いました。

昭和7(1932)年には松前に「義農青年団」が発足。毎月23日に義農神社に集まって、義農唱歌を斉唱したり、講和を聞いたり、墓地を清掃したりする行事が始まりました。こうして義農精神高揚の気風は各地に及び、全国各地から訪問参拝者が相次ぐようになり、戦時体制に入ったため、昭和10(1935)年には顕彰事業はや

明治14年、作兵衛をまつる「義農神社」が建てられました。昭和33年には神社に銅像も建てられ、毎年4月23日にはここで義農祭が行われています



義農祭

作兵衛の遺徳をしのんで毎年4月23日に開かれています。式典のほかに「義農太鼓」「伊予万歳」などの伝統芸能が披露されたり、生産者が持ち寄った野菜・花・果物などが販売されたりしています。



義農作兵衛

詞 星野哲郎/曲 島津伸男
1990年に作詞家・故星野哲郎さん作詞による『義農作兵衛』という歌が誕生。水前寺清子さんが歌いCDを出しました。

愛農炎歌

詞 星野哲郎/曲 島津伸男
「義農作兵衛」のカップリング曲。作兵衛の生きざまが描かれています。伊予民踊研究会はこの曲に合った振り付けをして、数多くの発表の場に立っています。



松前小学校校歌

松前小学校の校歌の2番には、義農精神がうたわれています。
詞 黒田勉
匂う若苗野はひろびろと
義農の誓い花開く
みんなやさしいよい子ども
明るい海がよんでいる
たのしい松前小学校



義農まんじゅう

麦みそを使った小振りなおまんじゅうは昔懐かしい味。山田貞子さん=南黒田=を中心に「生活研究グループ」が考案。現在は「義農まんじゅうの会」が義農祭で販売しています。



義農まんじゅうの会会長 山田貞子さん

義農作兵衛は松前町の歴史です。作兵衛のやさしい心を思うと、これで終わってはいけないと思いました。いつの時代も考えてほしいし、つないでほしくて。おまんじゅうにしたら伝えていけるのかなと思って作りました。



句碑

作兵衛の功績は、大勢の著名な歌人や俳人によって詠まれました。高浜虚子は義農神社で「義農名は作兵衛と申し国の秋」と詠みました。正岡子規は「初鷄も知るや義農の米の恩」と詠んでいます。虚子の句碑は義農神社に、子規の句碑は松前中学校前(写真)に建てられています。



まさき音頭

運動会や盆踊り…。松前に住む人なら誰でも一度は踊ったことがあるのでは？ 合併35周年を記念して一般公募で選ばれた歌詞に作兵衛をしのぶ心がうたわれています。

詞 日野管夫
瀬戸の春風 麦田に吹けばヨ
義農祭りの 人の波
忘れられない われらが偉人
惚ぶ心に 笛が鳴る ホラ
みんな踊ろよ 輪になって
なもしまさきは
よいところ

義農太鼓(昭和56年)

義農精神を太鼓の心として、豊かでたくましい松前人を目指し、松前小児童の手から手へと継承されています。



松前町文化協会会長 満田泰三さん

校長として松前小学校に勤めている時に発足させました。これからは「義農精神」をつないでいってほしいです。来年は義農太鼓発足30年。節目の年に、何か大きなイベントができればいいですね。



まちのいろんな機会に、いろんな場所で、作兵衛は生きています。

バスケットがしたい

毎週水、土、日曜日に活動している「松前スポーツ少年団松前オールスターズ・ミニバスケットボールクラブ」。仲島徳朋さんが指導、23人の子どもたちが練習に励んでいる。「バスケットがしたい」という思いが、指導者と選手をつないでいる。

東浦元樹くん(小6) 南黒田・写真◎
濱田 仁くん(小6) 南黒田・写真◎



**Higashiura Motoki
Hamada Jin
× Nakajima
Michitomo**

娘がミニバスに入ったのが指導のきっかけでした。私は中学時代からバスケットを始め、社会人になっても続けるほどバスケットが好きです。当時はまだ女子しかなくて、下の息子は女子の中に一人入って練習していました。それなら男子チームをつくらうと思って。以来、男子チームを指導しています。教えたことを子どもが一生懸命やってくれるのがうれしいですね。こちらがエネルギーをもらっています。15年間指導を続けてこれたのは、やっぱりバスケットが好きだからです。

仲島コーチは厳しい時もあるけど優しいコーチです。「ミートシュートがうまいからどんどん打っていけ」とか「得意なドリブルを生かせ」とか、選手一人一人のいいところをほめながら指導してくれるので、頑張ろうという気持ちになります。それから、コーチは僕たちのことを信用してくれています。だから僕たちもコーチの指導に応えられるように、強い気持ちでバスケットをしたいと思います。バスケットを教えてもらうのが仲島コーチでよかったです。

仲島徳朋さん 新立



作兵衛の精神は「義農精神」として今日も脈々と受け継がれています。
義農精神は「私」より「公」を、「己」より「他」を大切にすること。しかし、今は、必ずしも全ての人が「私」より「公」を優先できる時代でもなければ、「己」より「他」を大切にできる社会でもありません。ましてや、わが身を犠牲にする機会もなかなかない時代です。
わが身を犠牲に、までとはいわなくても、奉仕の心で活躍している人はたくさんいます。今回、3組の皆さんから話を聞きました。
自分がしたくてやっていることが、誰かに喜びを与えていることがあります。自分が好きでやっていることが、人の役に立っていることがあります。自

分が助けてもらおうと行動したことが、実は誰かを助けていることだってあります。そう、自分を犠牲にしなくても人の役に立つことは身近なところたくさんあるのです。大切なことは、そこに気付くことです。
どんなに小さな行動でも、誰かのためになることは、それ自体が「奉仕」です。実は、このちよつとした行動こそ、奉仕の心を長続きさせる秘けつ。好きだからこそ続けられる、それを誰かが喜んでくれたなら、こんなにすてきなことはありません。そう思いませんか？
小さな奉仕の積み重ねは、自分の心を豊かにします。自分の心が豊かになると、家族の心が豊かになります。心豊かな家族が増えると、やがて地域は動き出します。

人々を動かすDNA 現代の義農作兵衛を探せ

大勢の人の思いが重なり合って受け継がれてきた「義農精神」。今、松前町には義農作兵衛のような人がいるのだろうか。現代の義農作兵衛を探す。

育児仲間がほしい

入園前の子どもを持つ母親の子育てサークル「Cherry Blossom」。インターネットで知り合った育児中の母親のオフ会として町内で始まった。「育児仲間がほしい」という思いが集まり、形となって輪を広げている。

深野香織さん 徳丸
夢翔くん(9カ月)



**Fukano Kaori, Yumeto
× Yamada Megumi, Kota**

今年の5月から参加しています。初めての子育てに悩んでいる時にこのサークルに出会い、参加するようになりました。最初に参加した時は、まだ夢翔が3カ月だったので、周りが気遣ってくれたり、先輩ママが

アドバイスしてくれたりしてうれしかったです。子どもたちも赤ちゃんだと分かるので、小さいながらも気を遣ってくれました。さっきも夢翔が食べられそうな食事を「夢くんどうぞ」と渡してくれたんですよ。親子ともお互いに影響を受けながら成長しています。

育児相談がしたくて5年前から参加しています。最初に来たのは上のお姉ちゃんが1歳の時。週1回の集まりでは、工作をしたり、料理をしたりしながら、育児に関することをたくさん学ぶことができました。い

ろんな年齢の子どもが参加しているので、お姉ちゃんはお姉ちゃん、サークルの中で自分より小さい子と遊びながら「小さい子には優しくしなきゃいけない」ということを学んでいきました。だから今、航汰の面倒をよくみてくれています。

山田 愛さん 筒井
航汰くん(3)



村芝居が好き

高忍日売神社の虫干祭で、毎年村芝居を上演している「徳丸一座」。昭和44年から25年活動が中止されていたが、仙波規孝初代座長らによって平成5年に復活。そこには芝居をしたい人と見たい人の思いが交差する。

八束禮三さん 徳丸



**Yatsuzuka Reizo
× Senba Noritaka**

昔も今と同じで、虫干祭の時に神社にステージを設けて村芝居が披露されていましたが、昭和20年代、私は県外に出ていましたが、夏休みに徳丸に戻って来ては、村芝居を見ていました。だから、村芝居が復活してとても懐かしく思い、本当にうれしかったです。以来、毎年村芝居は欠かさず妻と見に来ています。先日の全国サミットにも行きました。周りに座っていた人がみんな、徳丸一座の芝居で涙を流していました。心に響き、たくさん感動をもらいました。

仙波規孝さん 徳丸



地元の秋祭りに参加する人が減り、みこしが担げなくなった時、私が部長をして消防団が中心となって担ぐようになりました。そして「昔やりよった芝居やるや」という話から、動き出すことにしました。復活後、初の芝居で主役を任せられました。心で演じるのは難しく、人前に立つのは恥ずかしかったですよ。でも、いざやってみると見てもらうのがうれしかったですね。地元の人も「今度何するん？」って言ってくれます。そういう声があるから続けられています。

志は高く、敷居は低く
世代を超えて一体感をもたらした第九



合唱団員
原博邦さん

Hara Hirokuni

今年初めて参加しました。音楽は好きだけ合唱経験はありません。去年は参加する勇気がなくて。今年は顔を知っている人もいし、松前町第九演奏会という身近なチャンスに思い切ったのでした。楽しいです。参加してよかったです。



指揮 伊予高吹奏楽部顧問
長谷川公彦さん

Nagasawa Naoyuki

歴史的な傑作であるベートーベンの第九に、幅広い世代の人と一緒にチャレンジできてうれしく思います。去年大勢の人に聞いてもらいました。今年も手作り感を大事にしながら、人の良さがにじみ出るような演奏をお届けしたいです。



合唱団員 松前町第九実行委員
麻生美智子さん

Asou Michiko

やれるか不安でしたが1年越しで計画すればできるかなとチャレンジした松前町第九。指導してくれる人、合唱団に入ってくれた大勢の人のおかげで動き出しました。周りに「よかったよ」「来年は出たい」と言われると続けずにはられませんでした。



辻井夏海さん 美由紀さん

*Tsujii Natsumi
Miyuki*

ピアノを習っている娘がベートーベンの曲を練習していたので、昨年聴きに行きました。ホール全体に響く美しい歌声は迫力満点。こんなにも本格的な第九を地元で聴かせてもらえてうれしいです。今年も聴きに行きます。今から楽しみです。



ひまわり合唱団
玉乃井優さん 東麻依さん

*Tamanoi Yui
Higashi Mai*

去年もそうだったけど、ドイツ語の歌詞を覚えるのが大変です。でも、ひまわり合唱団だとソプラノしかないで、アルトやテナーの人と一緒に歌えてうれしいです。それから、高校生の生演奏で歌うことができるのも幸せです。



合唱団員
兵頭美貴子さん

Hyodo Mikiko

大勢の人が一緒になって、大勢の人前で歌う。去年のあのステージでの一体感が忘れられず今年も参加しました。前は緊張してしまって余裕がなかったので、2度目の今年はステージからじっくりお客さんの表情を見て歌いたいです。

「不可能が可能」に「夢が現実」になることがあります。奉仕の連鎖は、人と人をつなぎ、まさに一体感をもたらします。チームプレーこそ、限界を突破する、描いた夢を実現する最善の方法なのです。

大勢の人の力が一つにまとまると、不思議なことに「不可能が可能」に「夢が現実」になることがあります。奉仕の連鎖は、人と人をつなぎ、まさに一体感をもたらします。チームプレーこそ、限界を突破する、描いた夢を実現する最善の方法なのです。

「参加してくれる人がいるから」「聞いてくれる人がいるから」「歌う場所をつくってくれた人がいるから」「演奏してくれる人がいるから」「教えてくれる人がいるから」「歌ってくれる人がいるから」。第九合唱団とその周りには、奉仕の心が広がっています。一体感が生まれていました。



奉仕がつくる宝志の町
奉仕は凡人を才人に変える

「荒れ地を耕し、麦種を残す」。その行動の背景には、みんなで豊かになろうとする夢が描かれていた。

1_11月14日、今年初めて文化センターホールで練習が行われた 2_合唱の練習は週に1回。約半年続く。ストレッチや発声練習なども欠かせない 3_小学生から80代まで約200人が参加。経験の有無を問わず声を出す 4_昨年の演奏会の様子。「2010松前町第九演奏会」は12月19日 ①14時から松前総合文化センターで開かれる



「松」

前で第九をやる それは満田泰三

文化協会長の一言がきっかけで始まりました。会長から実行委員会立ち上げの相談を受けた実行委員の麻生美智子さんは「指導者もいない、オーケストラもない中で第九なんて、無茶に思えました。すぐにやりましょうとは返事できませんでした」と振り返ります。麻生さんは、公民館で合唱指導をしている八木代志子さんと町内関係のソリストや県立伊予高校の吹奏楽部に掛け合いました。そして1年半後、ついに夢は実現したのです。

「音」

楽を通して松前町を盛り上げたい

地域を越えて広がり、一つになった「松前町第九演奏会」。それはどこか、みんな豊かになろうと夢を描き、荒地を耕し、麦種を残

「2009松前町第九演奏会」は昨年12月20日、松前総合文化センターで開かれ、小学生から80代まで総勢214人の「松前町第九合唱団」が高らかな歌声を響かせました。

会場は約700人の聴衆で満席状態。ステージは、第4楽章「アレグロ・コン・フォーコ」から始まり、ソ

リスト志村文彦さんの掛け声に合わせて214人が迫力満点の大合唱。息の合った歌声に、会場から割れんばかりの拍手と歓声が起りました。

第九を初めて聴いたという西古泉の主婦辻井美由紀さんは「ここまでやるとは思いませんでした。力強く美しい歌声に、ただただ圧倒されました」と興奮気味に話していました。

演奏会は大成功。終了後、実行委員会には多くの反響が寄せられました。そして今年も、ミラノから藤岡陽子さん、ボストンから八木徹雄さんをソリストに迎えて「第九」を開催することに。現在、12月19日の演奏会に向け、練習は大詰めを迎えています。

第九(交響曲第9番) ベートーベンの交響曲第9番二短調作品125(ドイツ語: Sinfonie Nr. 9 d-moll op. 125)は、ベートーベンの9番目にして最後の交響曲。日本では親しみを込めて「第九」(だいく)とも呼ばれている。

奉仕と感謝の連鎖

奉仕の心を長続きさせるには「感謝する」ことが大事。
感謝の気持ちが伝われば、また奉仕したくなる。
奉仕と感謝の「連鎖」が、やる気や行動を生み出している。

松前には、奉仕の心を持った人がたくさんいます。誰かの役に立つことを当たり前にしている人たちがたくさんいます。第九に代表されるように、一人一人の力は小さくても、みんなの力を合わせれば、地域を動かすほどの大きな力になります。

自分では気付かない小さな行動が、誰かを笑顔にしています。周りに小さな幸せを与えています。皆さん、気付いて

ていますか？それが「奉仕」です。気負わない行動だからこそ、無理のない活動だからこそ長続きするのです。

一方、奉仕を続けるために大切なことは、「感謝」の気持ちを伝えることです。「お疲れさま」「ありがとう」。素直な言葉は、また、人を動かします。自分の行動が、人の役に立っていると感じれば、誰だっとうれしくなります。

「奉仕の心」は「感謝の気持ち」を生みます。「感謝の気持ち」が生み出されると、また「奉仕」したくなります。そう、奉仕と感謝はつながっているのです。奉仕と感謝の「連鎖」が、やる気や行動を起こすのです。

その積み重ねが「あの人を放っておけない」という「奉仕の人」を増やします。「奉仕の人」が増えれば、人と人とのつながりが広がり、地域に一体感が生まれます。だから地域は強くなるのです。

さあ、「奉仕の人」の一步を踏み出しましょう。あなたの一步が地域を変える力になります。平成の義農作兵衛は、ここ松前に住み、生きるあなたなのです。

「義農精神」が

松前人のスピリットなら

「作兵衛主義」は

松前を変える指針や信念です

奉仕の人がつながれば

きっと町は変わります

もうお気付きですね

平成の作兵衛は

この特集を最後まで読んで

あなたです

「あっぱれ作兵衛 義農伝」のラストシーン。出演者全員がテーマ曲「思いは伝わる」を手話付きで歌った。頭をさげながら右手を上げる手話は感謝の気持ち「ありがとう」です